

## 宇田川政夫さんをしのぶ

昭和30年千葉大学園芸別科（花卉専攻）を卒業し、南アメリカのウルグアイに移住して、花作りを続けていた宇田川政夫さんが亡くなった。宇田川さんは平成13年に花葉会賞を受賞している。

1988年からの20年間、私の40代と50代を費やして、南米に自生のペチュニアを研究してきたが、ウルグアイでの研究は全て、宇田川さんご家族の支援を受けて行われたものである。宇田川さんが「毎年、日本から台風がやって来るようになった」と言っていた。むちゃくちゃご迷惑をおかけしたのに、「農場が安定したら、必ず伺いますから」という約束を果たせなかった。悲しいです。申し訳ありません、宇田川さん。

ウルグアイは、人口340万人、国土は日本のおよそ半分だから、南米では小国と言ってよい。東京の反対は、首都モンテヴィデオの沖に位置する。常春の国でもあり、リンゴ園とレモン園が隣り合わせという、信じられないような風景も見られる。1920年代のフォードTから今年の新車までが、街中を平然と行き交うクラシックカーの王国でもある。また、ペチュニア品種の歴史的な両親（*Petunia axillaris* と *P. integrifolia*）はこの国の出身である。

宇田川さんに初めてお会いしたのは1984年、33年前のことである。JICAの派遣専門家として、隣国アルゼンチンの首都、ブエノスアイレスに滞在して、現地と近隣諸国の日本人移住者が営む花卉生産の指導にあっていた時である。日本ではあまり知られていないが、日本からの移住者が非常に多いブラジルとパラグアイは別として、他の国々に移住した日本人の従事する主要な業種は花卉生産業であり、日本人＝花作り、という印象すらもたれている。そうした国の一つがウルグアイである。最近では外人さん（日本人以外のこと）も増えたが、私の知っているウルグアイでは10数戸の日本人家族だけが花を作っていた。

モンテヴィデオ行き飛行機の中で、日本人と知ると「花作りか？」ときいてきた人がいた。近くにとても綺麗な花を作る日本人が住んでいる、と自慢げだった。宇田川さんのことだ。

軍用地とは知らず、柵の脇に咲くペチュニアの撮影に夢中になっていて、兵隊さんにライフルを突きつけられて連行されてしまった。学生（武藤）は何が起ったのか分からないらしい。こういう時は日本語で説明できない。あせった。でも隊長さんは、日本人と分かるとすぐ、花作りの話、宇田川さんの話を始めた。「その宇田川さんに車を借りています。友人です」と、まくし立てた。電話に奥さんが「怪しいものではない」

と答えてくれたらしく、無罪放免となった。腰から力が抜けた。

5日間の探査を終えて、国道5号をモンテヴィデオに向けて南下する。牛が草をはむ。なだらかに丘がうねる。気分爽快。La Pazの入口を左折。と、すぐ左側に紫色のサルビアがいる。街の中心を左に折れる。

1Kmほど先の右側に採石場跡があって、*P. axillaris* が咲いている。その向かいの温室群が宇田川さんの農場。入口の緩やかな斜面にちょっとアクセルを踏んで車を止めると、ポチがしっぽを振った。ほっとする瞬間、ここは日本だ。今夜は奥さん手作りの日本食。これがうまい。

昨日のように鮮明な、こうした記憶は山のようにあって書ききれない。だが、【学生に怪我をさせない】という私の最小限の責務を無事に果たせたのは、宇田川さんご家族のおかげであることを明記しなければならない。

Punta del Esteという大西洋に面した避暑地には、アルゼンチン富豪の別荘が延々と立ち並ぶ。拝見させて頂いた庭には、一面に花が咲いていた。それがサカタの品種であることと、圧倒的な品質であることで、すぐ宇田川さんの産物と分かった。他にない品種と、高い技術、それにこの国の膨大な需要、それが宇田川さんの成功を導いた源である。宇田川さんは、そこにドメイン（生存領域）のあることを察知していて、移住し、花作りになるために、園芸学部に進んだのである。はっきりした目的をもって過ごした松戸の記憶は、深く熱いもののように、よく会話に出てきた。

「古き良き文化は、文化の周辺地帯に残る」という法則がある。園芸学部は変わってしまった。だが、その【古き良き】と言わねばならない伝統は、地球の反対側、最遠の国、ウルグアイに生きていた。

末筆となりましたが、先輩＝宇田川政夫さんのご冥福をお祈りするとともに、ご家族の末永いご多幸をお祈りします。

宇田川政夫

昭和7年8月31日 千葉県生まれ

平成29年7月21日没 享年86

安藤 敏夫 拝（千葉大学名誉教授）